

及川文子氏著

『幼稚園の手技製作』に題す

—幼稚園手技製作論—

倉橋惣三

幼稚園を新らしく、否、ほんたうのものにするために、手技製作は最多く革新を要するものゝ一つであらう。

手技は幼稚園史の初めから重んぜられた保育項目である。或は幼稚園教育原理の中心意義を代表するものとせられた。すなはち外から與へらるゝものを受くる生活に對して、内からつくり出す生活として尊重せられた。古人の着眼の秀拔なることは言を俟たない。しかも、われ／＼は、いつまで此の教育説のおほまかさ止まつてゐるべきであらうか。

つくり出す生命の尊重は、やがて、つくらせる技巧の教

育に遷つた。之れは一應無理からぬ順序でもあつたが、幼稚園手技としては墮落の傾きに入れるものであつた。

技巧の教育が練習主義になり。練習主義が作業工程の分析主義に導かれ、分析主義が幼児の生活的具體性を失はせるやうになつたのは、いはゞ免れ難い進路であり、進歩に似たる退歩であつた。幼児の生活的具體性を離れて、幼児教育の正しさは決してあり得ないからである。しかも、曰くきり方。をり方。たいみ方。はり方。曰く何方。何方。作業工程の分析練的が、かうした名目で今も尙如何に多く行はれてゐることか。

勿論、分析的練習による技巧の上達が、其のこと自身として教育的意義の皆無なるものではない。幼児達の或る興味に觸れないものでもない。たゞ、それだけでは何等の生活性を有せない。而して、他に如何なる價值をもつてゐるものでも、生活性を有せないものは保育ではない。

x

幼稚園の手技を幼児の生活としての製作にかへすべきだと気がついてから、實體製作が分析的な手技に代つた。實物の寫生にせよ觀念の表現にせよ、その中心は、ものであつてつくり方ではない。素より、つくり方をしに何の製作も出ない。しかし、それはどこまでも方途であつて志念ではない筈である。志念は何かを——すなはち、何んかのものをつくらんとするにある。ものををつくらんとすること其のことを主として、つくり方を従とするところに實體製作がある。

幼児の興味が、つくり方よりもものに向つて先づ起ることとは言を俟たぬ。それがつくるに六かしいものであつても幼児として意に介するところでない。さつさとつくりやうと

し、さつさとつくり初める。其の粗拙は免れない。しかも、粗拙とは技巧者の目から見た批評である。つくるといふことの生活的意義は巧拙の外にある。眞保育が技巧的練習よりも實體製作を先にし、はじめから、ものに發せしむるは此の生活的意義を主とするからである。

x

ものは觀る興味と用ふる興味との對象になる。靜觀の興味を主とせるが單一實體製作あり、使用の興味を主とせるが目的製作、すなはち輓近教育學謂ふところのプロヂエクトである。之亦實體製作たるにをいてかはりはないが用途に即して興味をもち、用途を目的として製作するところに差がある。そこに單一實體製作以上に生活的意義が動いてゐるといへる。

今日の幼稚園に於て大に取り入れてゐるもの、而して古き幼稚園の手技が全くしらなかつたものが、此の目的製作である。之れに目的系列の大きい場合と極めて簡單なる場合とあるが、いづれにしても、ものを其の使用から離れた場なるものとしてつくつてゐないことに於て同一である。人

形に着せるための着物、まゝごとのための皿、それはたゞそれだけの目的系列であつても、着物を、たゞ着物らしく、皿を、たゞ皿の形に、單獨の興味でつくるのは異なる。そこに、生活主義保育の内に於ける手技製作の一層格段の位置が主張せられる。

但、目的製作のみが幼児の製作の唯一の心理だとすることは出来ない。必ずしも用途の意識なくして、ものそのものから製作動機は誘はるゝことも、幼児の心理の實際である。故に目的製作のみが、幼稚園に於ける手技製作のすべてであるといふことは出来ない。なぜとほなしの手技製作も當然其の存在権を幼稚園に於て有するのである。たゞ、その場合でも、幼児の志念は具體のものにある。即ち、實體製作であるのである。

x

しかし、實體製作であるから技巧は無用だといふのではない。たゞ、その技巧はどこまでも實體製作に伴ふて發達し、又、發達せしめらるべきものである。くはしくいへば實體製作の中に幼児自らが求めてゐる技巧の要求を根據と

して發達せしめらるべきものである。

幼児はたゞものをつくらうとしてゐるといへば、如何にも、技巧が幼児にとつて無關心のことのやうに聞える。又、さうだと主張してゐる論旨さへあつたりする。しかも事實は決してさうでない。勿論、技巧のための技巧の要求は幼児に少ない。況んや成人がもつやうな精緻なる技巧の要求はまだ幼児にはない。しかし、技巧本位者でない幼児にも技巧の要求は當然あるのである。

幼児にあつて、技巧の要求は二つの方面をもつ。一つの方面はもの、に即して表現の六かしさに會つた時、どうしてう、まくつくりおほせようかといふことであり、もう一つの方面は、幼児の内部から滲み出る美の自己要求をどうしてう、まく満足させようかといふことである。極く幼い年齢に於ては、自分の表現がものに即してゐようとゐまいと平氣でゐるけれども、既に幼稚園時期に於ては、發達尋常のものには相當の苦心をもつてゐる。そこに技巧の要求が自然に起るのである。此の要求をどこ迄自己工夫で解決させるべきか、どういふ指導法によつて満足させるべきかは、實際

保育の要訣に屬するが、いづれにせよ技巧に關する問題である。

幼兒の内から滲み出る美の要求に就ては素より其の發達に準じてゐるものであり、或る論者の如く過大視することは誤りであるが、幼兒自らに美の要求の存在せることは明かである。しかも、之れ亦、必ずしも容易に自らを満足させ得ると限らない。色でも、形でも、位置關係の排列でもそれを美ならしめてゆくべき技巧を探す必要に逢遇する。

之等の技巧は、技巧である限りうまくといふことを要件として居り、傍からそれを指導し手傳つてやる任務があるのは勿論である。しかし、それは、どこまでも幼兒の要求の手傳であつて、保育者自身の要求の満足を標準とすべきものではない。即ち、技巧に對する幼兒の要求そのものは段々と高めてゆかなければならぬのであるが幼兒が要求もしない技巧を——つくり方でも美でも——技巧そのものとして教へ示すべきではない。しかも、幼稚園の手技製作に從來此の點の誤が多くあつたのであるまいか。つくり方の名に於て器用過ぎる技能が美の名に於て繊細過ぎる巧緻

が、及ばざるを之れ憂ふるといつた風に、幼稚園に入り込んでゐたのも、此の誤りのあからさまな事實の一つである。

×

幼稚園の手技製作は幼兒の生活としてあり、其の技巧は幼兒自らの要求に準じて考へられ手傳はるべきものであるとして、幼稚園教育者が自ら如何なる習練を此の道に積んでゐなければならぬかはまた別の必要である。即ち、幼兒に教へるのではなく、幼稚園としての要求は簡單容易の程度であるにしても、教育者自らは繪に巧に、音楽にすぐれてゐなければならぬと同じく、手技製作に於ても、平生充分の研究と習練とによつて上達を期してゐなければならぬ。自ら巧みなる者は幼兒にも強いんとし、幼兒に即するものは自らも勉強に流れるの弊があるが、保育原理の如何に拘らず、教育者が自分の習練を怠つていゝ言譯はどこにも立たない。

況んや、幼兒教育者は、幼兒の手技製作を傍からするのみでなく、自ら先立つて之れに興味をもつ者でなければならぬ任務のあるに於てをや。自ら生活することによつて幼

兒の生活を誘導するのは、保育全般に亘つての通則であるけれども、手技製作に於てその必要と効果とが特に多い。しかも、自らうまくつくれる先生にして、初めて之れが眞に充分に實行せられ得ることは、更めて多く言ふまでもない。

x

此書の著者及川ふみ子君は、自ら手技製作に多大の興味と熱達とをもつ人である。東京女子高等師範學校技藝科を卒業、直に附屬幼稚園に奉職して以來、今日に至る十有六年の間、その専攻の技能を基礎として、幼稚園手技製作の研鑽につとめ、幼兒を導きつゝ、幼兒に學び、幼兒の生活と要求とに即しつゝ、獨創の工夫を怠らず、斯の道に於て殆んど大成の域に達するといふも過言でない。本書は私の慫慂を容れ、その多數なる獨自の考案中より選述せられたるもの、我國幼稚園のために寄與するところ最も大なるを信んじて疑はない。しかも、單に個々の製作法に就て學ぶのみならず、全篇を通じて、幼稚園手技製作の本義につき、著者の意圖の那邊に存するかを深思せられんことは、此書の

讀者諸君に向つて、私の特に希望して已み得ないところである。此の小序に於て私が述べ來つたところも、實は著者の主張を註釋せるものと言つていいのである。

著者は今も尚ほ孜孜として新考案をつゞけ、此書の稿の成つた後でも、既に幾種を案出せられたことであらう。幼兒のためにつくすと共に、自ら樂しむ人でなくては出來ない努力である。一案の成る毎に君は自ら樂んでゐるが、私はその度に、本書の續編の成るを期して樂しんでゐる。

——本誌廣告面參照——

